

あらやま ゆうこう
荒山 裕行

経済学部 客員教授
Ph.D(シカゴ大学経済学部)／
京都大学、シカゴ大学

ホームページ URL
<http://sites.google.com/site/arayamayuko/Home>

主な研究業績

- A re Japanese Labor Policies to Support the Young Generation Effective ? Issues from Economic Theory 2019. 03 共著
- 労働統計にみる男性の働き方・女性の働き方(全43回) 2006. 05～2016. 12 共著
- 「価格理論」－家計を内包する経済理論 2016. 03
- 展望：経済学に残されたフロンティア－貨幣理論 2015. 09
- グローバル時代における経済政策を考える 2015. 07
- Could we remain simply applying discount rate to evaluate the life quality of our future generations? 2013. 07
- 展望：経済のグローバル化は我々を取り巻くリスクを高めたのだろうか－経済学の視点－ 2013. 06
- 市場均衡の一般理論－「満足」をつくりだす家計内生産 2012. 03
- 「価値」－モノ造りの根本－ 2011. 09
- 国際協調の経済政策－「経済理論」はそもそもグローバル化した世界市場を扱えたのか？－ 2011. 05

キーワード

家計内生産、一般均衡分析、産業構造

研究テーマ Research theme

家計内生産を内包する一般均衡理論の構築

概要 Overview

シカゴ大学のベッカーは、財やサービスを作り出している家計内での生産活動を明示的に分析に持ち込み、労働市場を通し雇用される時間以外の時間の価値を経済行動の分析に組み入れ「マクロ経済学のミクロ的基礎付け」への途を開いた。家計構成員の経済行動を代表する家計内生産が経済モデルに組み込まれると、明日(つぎの期)も一定確率で家計構成員が「生きる」ことを前提とし行動することからその経済モデルそのものは本質的に動学となる。この研究の流れに則し、家計内生産を含め経済行動を「生産関数」のみを用いて統合的に扱える一般均衡分析の枠組の構築に関する研究を進めている。

応用分野 Application areas

「家計内生産」の考え方を部分均衡分析から一般均衡分析へと拡張することで、経済学が賃金を与件として労働時間が決定される「新古典派経済学」のアプローチから賃金と労働時間の決定を同時に扱える理論へと変化できることになる。このことで、経済学を①所得格差、②ワーク・ライフ・バランス③少子化の問題等の問題を捉える(実証する)分析道具からそれらの問題が生じるメカニズムを可視化することに応用できる分析的アプローチに変えられることを意味する。

共同研究等へのニーズ Need for joint research

一般均衡アプローチは、企業や家計レベルを対象とした分析ではなく経済全体のレベルを想定した分析アプローチとなる。このことから、本研究は、経済全体を対象とした政策提言のあり方の検討などの分野で有効な知見を提供できる可能性を持つ。